師匠と一夜

【夢男主ルート】子供たちの沈黙　後日談４

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18941907

モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 芹霊, エク霊, 夢男主, 夢男主×霊幻, 男性妊娠

リクエストいただきました、みーくんルートの後日談の４話目です。夢男主です。（https://pictbland.net/items/detail/1949705 ）←にて名前を変換して夢小説として非会員でも読めます。ワンナイトしまくってる師匠が相談所のメンツにバレて泥沼化する話の後日談にあたります。師匠の子供がしゃべります。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

【夢男主ルート】子供たちの沈黙　後日談４

目覚めないみーくんに、指先が冷たくなっていく。
みーくんを失いたく無い。
俺は見ないふりをしていた自分の気持ちに嫌でも向き合うことになる。
思えば。
最初にみーくんを助けたのだって、そういう下心があったのかもしれない。
「う……」
みーくんが唸って目をうっすら開ける。
「霊幻さん……？永崇くんは……」
ばっ、とみーくんの手を握る。出血多量で冷たくなっている手を暖めるように。
「馬鹿、今は自分の心配をしろ！……他人の子供を庇って致命傷を受けて、本当にお人好しが……！！」
「……霊幻さんと同じことをしただけじゃないか」
紫色の唇でみーくんは微かに笑う。
「俺、本当に霊幻さんに憧れてるんだ。いつか霊幻さんみたいに人を救える人になりたい。……そう思ってたら、身体が勝手に動いた。結界を咄嗟に張ったから致命傷にはならなかったけど、強度が全然足りなかったな……もっと修行しなくちゃ」
「……俺の真似をするなんて、馬鹿な事をしないでくれ。俺はただの偽善者だ」
ふふ、とみーくんは真っ白で怖いくらい綺麗な顔で笑う。
「霊幻さんが嫌いな霊幻さんのこと、俺、知ってるよ。ちょっとズルくて、子供っぽくて、甘えたで、自分勝手なの。……セックスしてたらさ、本性なんて丸見えだよ」
「〜〜〜っ、みーくん、」
「だからこそ、俺は霊幻さんが自分を好きになるために作り出した霊幻さんが、好きだよ。霊幻さんが努力して、心がけて、背筋のばして作り上げてきたものが、好きで好きでたまらない。霊幻さんが

好きだと思ってる霊幻さんが、好きだ」
──それは。
俺の『生き様』を好きだと言われているようで。
これまでの努力が報われていく感覚。
「だから俺はそれを支えられるような男になれるよう頑張ってきた。……支えさせて欲しい。完璧にはできないだろうけれど、子育ても手伝わせて欲しい。霊幻さん、」
ぎ、と横を向いて俺の手を両手で握るみーくん。
「あなたのパートナーに、俺を選んで欲しい」
無精子症になってからの、これまでのつらいことを思い出して、ブワッと涙が溢れる。
「お前……こんなにいい男なのに、俺なんか選んで……」
「霊幻さんの哲学が俺をいい男にしたんだよ。俺は霊幻さんを好きだからいい男なんだ」
降参だ。
「俺も、みーくんと生きていきたい」
「……！霊幻さん……！」
「ずるいかもしれないけど。俺のことを好きな、みーくんが好きだ」
涙が止まらない。そんな俺をぐいっと引っ張って抱きしめるみーくん。
「霊幻さん……嬉しい。幸せにします」
「うん……おれもみーくんを幸せにできるよう、頑張るな」
なにせ俺ばかりが得する関係だ。これは頑張らないとな。
「霊幻さん」
みーくんがつうっと俺の唇に触れる。
応えるように俺は目を閉じて、みーくんと唇を合わせようとして……寸前で止まった。
「……薬師先生、いつまで覗いてるんですか」
８つの目でじっと見つめられてはやりづらくて仕方ない。
「バレとったか。いや、この村でカップルが成立するなんて何百年ぶりだから、こう……甘酸っぱくていいね〜！！」
「見せもんじゃないですよ！」

「いいだろう？少しぐらい……おい美築、フラッシュモブが必要なら協力するよぉ？」
みーくんの貧血気味の顔に朱が差す。
「余計なお世話です」
「祝言はいつ上げるんだい？」
「出産が終わって落ち着いてから……パートナーシップ宣言を利用しようかと」
「みーくん！？」
「もうこうなれば逃がさないよ。巻きで進めるし外堀も埋める。結婚してくれるよね？俺をもてあそんだんじゃないよね、霊幻さん？」
ぱくぱくと口だけが開閉して声が出ない。
「はい……」
かろうじてそれだけ言えて、翌日にはAmazonで婚約指輪が届いた。

「「村の中で祝言とは、ハァダ様が喜びます」」
休み時間にニコニコと笑う双子に祝われる。
あの野郎、有言実行、村中に言いふらしたな……。
「「最近村の様子がおかしいので、めでたい話は嬉しいです」」
双子の顔が曇る。
「そうだな。物騒な事件が続いた。みんな集団登下校を守るようにな」
神の子、霊の子、能力者の子のスリーマンセル以上で最近は行動させている。
「「はぁい」」
強力な神の子がついていれば犯人もなかなか手を出せないのか、あれから被害者は出ていなかった。
だから俺は気になっていたことを試しに、永崇とハァダ様のお堂に向かっていた。
山すそにあるハァダ様のお堂は、手入れされてはいるものの、古くて異様な雰囲気を放っていた。
何より、そのつくりだ。
ハァダ様のお堂はまるで牢屋のようで、木の格子が前面にはまって

いる。格子の一部がドアになっていて、中に入れるようなのが、よりいっそう牢屋のようだ。
中は昼間でも薄暗くてよく見えない。
左右にぼんぼりみたいなものが立てられ、真ん中に仏像のようなものが見える。あれがハァダ様だろうか。
「……ハァダ様、村にコンビニが欲しいんだが」
とりあえず話しかけてみる。永崇がぽかんとしている。
返事はない。やっぱり俺じゃ無理か……
「……お母さん」
永崇がお堂を指差す。
お堂の中が、懐かしい緑色に光っていた。
「お父さんが、話したいって言ってる。……どうする？」
胸から下げた婚約指輪を思わず握る。
「……話そう」
「分かった。ハァダ様、繋いで」
お堂の中に不気味な緑色の光が溢れて、それが緑色の鬼火の形に収束する。
「……よぉ。元気そうだな、霊幻」
「何の用だ、エクボ」
「いやなに、永崇に殺気が向けられたのを察知したからな。様子を知りたくなっただけだ」
「お父さん、俺に何か細工してるの？」
「お前の霊素はほとんどが俺の物だ。まだ繋がってるんだよ」
「そう……ならいいけど」
「おい霊幻、何が起こってる？」
ちゃり、と胸元の指輪を鳴らして眺める。
エクボの目が見開かれた。
「お前それ」
「ん？ああ、今度結婚するんだ」
エクボの口がわななく。
「そ、うか」
「うん。いま、村では……」
事件のあらましをエクボに伝える。

「奇妙な村だな。警察に入られるとマズイことでもあんのか？」
「見た目から普通の子だと思えない子供もいる。あまりよそ者は入れたく無いのは事実だな」
「よそ者……ヨソモノねぇ。そういやなんで大人を村人にしねぇんだよ。子供の親だろうが」
「それは」
ハァダ様が決めたから、と言いかけて口籠る。俺もそうとう村に染まってきてる。
「おそらく呪術的に『分ける』必要があるんだ。よそもの……よそう者、とかな。食事をよそう、贄として食卓に乗せられないように気をつけろよ。今回襲われた子供達もそうだ。何か意味が無いか、ちゃんと調べろ」
ゾクっとする。基本的には何もしない大人が、この村で無意味にハァダ様に生かされ続けている理由を嫌でも考えてしまう。
「そうそう、切り裂き魔の正体だがな、なんとなくはもう俺たちは分かってる。たぶんだがな。厄介な相手だぜ？俺たちが手を貸してやろうか？」
ニヤニヤと笑う悪霊に。
「え、いいのか？じゃあ頼むわ」
と言うと、ズリっと何かからずり落ちるような仕草をエクボはした。
「お前ってやつは……」
「ずっと言ってるだろ、俺はお前たちを信じてる」
真っ直ぐエクボの目を見つめる。
ふい、とそらしたのはエクボだった。
「その……ダンナはどんなやつだ？いい奴か？」
「……ああ。永崇を身を挺して助けてくれた。俺や子供達を大事にしてくれる、いい男だ」
「そうか。そいつはかなわねぇな」
今までに聞いたことのないような穏やかな声をして。
「やっと、熱病から抜けた気分だ。不思議と穏やかで……凪いでいる。なあ霊幻、」
そして、聞いたことのないような甘い声で。

「不幸になったら容赦しねえぞ」
俺は嬉しくなって頷く。
「永崇も……元気でな」
優しい父親の声で。
心から、俺たちの幸せを願う言葉を聞いて、俺は初めてエクボから告白された気分になった。
「ごめんな、エクボ。お前を選んでやれなくて」
「何言ってやがる。そんなことを今更」
「誠意には誠意で応えただけだ」
「誠意……そうか、これが誠意か……今更そんなものを学ぶなんてな……」
どこか嬉しそうに悪霊が目を細める。
「本当はシゲオが出張らなきゃいけない案件だが、とにかく村へのバイパスを広げなきゃいけない。明日は芹沢がここに出る。必ず来いよ」
「分かった」
「……じゃあな、霊幻。俺様は、いつも──」
エクボの姿がふっと消え、通信が途切れる。
「ハァダ様が疲れた、って」
永崇に言われて頷く。胸がぽかぽかと暖かくなっていたが、それと同時に、『犯人』は野放しなことに危機感を感じた。
「黒霧と、永崇の共通点……」
まさか。
悪霊の子……？
「センセイ！」
お堂の前にお礼の卵焼きでも供えようかと思っていたら、龍の子に声をかけられた。
「鬼火が襲われて……！！」
龍の子に言われて慌てて病院に向かう。
「薬師先生！」
「おお、センセイか。一命は取り留めたが、霊素を失い過ぎている。こればかりは……」
す、と永崇が鬼火少女に手をかざす。

ぶわ、と緑の光が少女に吸い込まれていった。
ふ、と鬼火の顔色が目に見えて良くなる。
「……これでどう」
「驚いたな……蜂蜜の親となった悪霊は、よほどの者だったみたいだねぇ。この子は……霊力が強すぎるな。良い未来を用意するのがもしかすると難しいかもしれんぞ、センセイ」
俺は優しく永崇の髪をなでる。
「ありがとな、蜂蜜。大丈夫だよ、薬師先生。この子の父親も俺には勿体無いほどのいい男だった。この子には無限の可能性だけが待っているさ」
にっと永崇が笑う。
「……驚いたな。無理矢理孕まされたのかと思ってたが」
「ん？俺はあいつの子供を産むこと自体は嫌じゃなかったよ」
「お父さんの言いなりになるのは嫌だっただけだよね」
「そうだ。それの道具に子供を使おうとしたことが許せなかっただけだ」
ふ、と遠くなってしまった相談所を想う。
「俺はアイツを愛していたよ。ただ、アイツが望む愛し方はできなかっただけで」
もし、エクボがそれに気が付いてくれたのなら。
俺の指にハマっていたのは、エクボからの指輪だったのかもしれないな……。
「センセイは蜂蜜のことも、その父親のことも信じてるんだねぇ」
「まあ、そうだな」
「なるほど、蜂蜜が人の姿を取り続けることができるわけだ。いいお母さんを持ったね、蜂蜜や」
なんだか照れ臭い。
「じ、じゃあ薬師先生、鬼火のことを頼むな」
「任せておきなぁ」
そそくさと病院を後にする。
と。
途中に新しい道ができていてその先に見慣れたコンビニの看板が光っていて驚いてしまった。

「……ハァダ様、便利だな」
「お母さん！？濫用は駄目だからね！？」
神様は用法要領を守って。
「また明日来てみよう」
今日は時間が遅い。家に戻ると、もう茂隆とみーくんは眠っていた。
思わずどこで寝るか考えてしまう。
いやいや。
俺は茂隆の横に永崇の布団を引き、みーくんの隣に自分の布団を引いて眠りについた。

※

起きると、がっちりとみーくんにホールドされていた。なんでこうなった。
「ちょっ……みーくん、起きて……」
「んー……？なんかいい匂いするね、れーげんさん……」
「嗅ぐなっ、起きろー！！」
叩き起こしてコーヒーで目を覚まさせる。
「みーくん、頼みがある」

村内放送で今日は休校することと、神の子と『持ち過ぎた』子は一緒に過ごすこと、霊の子は俺の家に集まることを伝えた。
まあ、放送装置が子供達の家にあるので、行って伝えたようなものだが……。
「みーくん、頼んだ。これまで襲われたのはみんな霊の子だ。時間帯も夕方に集中してる」
「分かったよ。強力な結界を張る。それを俺が中から強化しよう」
頷いて俺は家を茂隆と後にする。
ハァダ様のお堂の前に立つと、ぼわ、と青色の光がお堂の中に現れた。
「お母さん、克也父さんと話す？」
茂隆の言葉に頷く。

光は椅子に座った芹沢の形に収束した。
「……久しぶりですね、霊幻さん」
「おう、久しぶり」
どこか驚いた顔の芹沢に片手を上げた。
「繋がった。繋がるんだ──」
芹沢の目に涙が滲む。
「腹の子は、俺の子供なんですね」
驚いていると、そんなことを涙声で言ってきた。
「この通信は、血筋の近い者がいないと繋げられないんです。そうか、俺が父親か──」
……俺のワンナイト遊びのせいで、芹沢にはつらい思いをさせてしまった。
その後ろめたさから、俺は嬉し泣きをする芹沢をしばらく眺めていた。
「……本題に入ります。今回の件、『霊とか相談所』の正式依頼として引き受けさせてもらいます。本気のＣコースです。こちらで主に影山君が調べているので、解決は時間の問題だとは思いますが、今晩が危ない。──だから、解決策をお伝えしておきます」
ごくり、と固唾を飲んで待つ。
「『やめてください』、とお願いしてください。いいですか、何度もですよ。何度もそれを──」
目を見開く。まさか。そんな。
「俺たちがそちらに行ければバリアで安全を確保できるんですが、その禁足地には俺たちは入れないので……日輪の霊能力者となんとか乗り越えてください」
ちら、と俺の指輪を見る芹沢。
「結婚、されるんですね」
「ああ。好きな人ができたんだ」
芹沢は指を合わせて目を落とす。
「ショックですけど……俺はやっと、正気に戻れた気がします」
泣きそうな顔をしながら、顔を上げて。
「霊幻さん──どうか、幸せに」
その切ない響きに、胸が締め付けられる。

「芹沢、お前を好きになってやれなくて、ごめんな」
「いいんです。俺は最初から振られてたんですから」
切ない顔をしていた芹沢が、戸惑いがちに口を開く。
「あの。お腹の子に、名前を俺から贈ってもいいですか？」
ぶんぶんと俺は頷く。
「そういう約束だったじゃないか」
「では──『阿頼耶』、と。『阿頼耶識』の阿頼耶です。この世の全てを心に保って、失わない心を願って。目に見えないものを識る事ができる人に、霊幻さんのように、なれることを祈って」
愛おしそうに芹沢は俺の腹に手を伸ばす。
「あらや──」
ぷつ、と通信は切れて。
「……ありがとう」
俺は腹を撫でながら、そっと呟いた。

コンビニでお菓子やスイーツを買ってから、退屈してたであろう霊の子たちが待っている家に戻る。
「ノウマクサラバタタギャテイビャクサラバボッケイビャクサラバタタラタセンダマカロシャダ ケンギャキギャキサラバビギナンウンタラタカンマン」
みーくんが五鈷杵を手にぶつぶつ呪文を唱えている。
部屋の四隅には札と盃に入れられた酒が供えられている。
「逢魔時が来ます。３時間ほど、耐えましょう」
みーくんが緊張した声で全員に言った。
子供達とカードゲームやボードゲームをしながら、コンビニスイーツをつまんで時間が経つのを待つ。
「お泊まり楽しい！」
三つ目が叫ぶ。このまま何も無く終わってくれればいいんだが……。
じゃり、と家の外で、草履の音がした。
一瞬で子供たちが黙り込む。
草履はじゃり、じゃり、と家の周りを歩き回る。入り口を探してるようだった。

ぎゃりり！
「ぐっ！」
入り口が見つからなかったソレは、何かで結界を攻撃した。結界を支えているみーくんがうめく。
がっ！がりり！ぎゃりりり！ががっ！
攻撃が激しくなる。
「ノウマク……サラバタタギャテイビャク……サラバボッケイビャク……」
みーくんの息が上がっていく。
ガッッッッッツ！！
「ううっ！！」
ビキィ、と結界にヒビが入った。
「……っ、『やめてください』！」
俺は思わず叫ぶ。
と、不思議なことに、家の外にいる何かが動揺したように砂利を鳴らした。
「『やめてください』！」
「『やめてください』！」
子供達が俺に続く。
明らかに外からの攻撃が緩んだ。
「やめてください！」「やめてください！」「やめてください！」「やめてください！」「やめてください！」「やめてください！」「やめてください！」

「やめてください、ハァダ様！！」

は、と口を押さえて。

子供たちは、沈黙した。